

一念一念の積みかさね

去る、十二月十六日(日)に開催した

『第十一回冬至水行祭ほしまつり』は、県内外から197名という多くの水行参加者をお迎えし、無事に執り行うことが出来ました。また翌日のYahoo!ニュースのトップ記事として、水行祭が取り上げられるなど、嬉しいサプライズがあったりと、今年度も新たな物語を紡ぐことができ、清々しい気持ちで新年を迎えることができました。来年度は十二月十五日(第3日曜日)に開催が決定しました。皆さま是非お越しいただき、全国から注目されている水行祭を、ご堪能いただければ幸いです。

さあ、あらためまして、明けましておめでとございませう。平成最後のお正月を迎えました。振り返れば瞬間に1年が過ぎ去り、また新たな齢を重ねようとしています。

さて、年が明け、皆さまの関心は、やはり新元号が何に決まるのか?という事ではないでしょうか。新元号に関しては、色々と想像を膨らませてご発表を楽しみに待ちたいと思います。この度のように、天皇陛下のご退位によって皇太子様がご即位されるのは、江戸後期の1817年に119代光格天皇(1771~1840)以来、およそ200年ぶりとなるそうです。いよいよ近代日本で、初めて天皇と上皇が同時に存在する時代が訪れます。政府は、天皇陛下のご退位日を2019

年4月30日と決定しました。そして、皇太子様は5月1日に新天皇としてご即位され、「平成」の時代に幕が下り、新しい元号の時代が始まります。

振り返れば、昨年8月8日、10分あまりに及ぶビデオメッセージで、「天皇もまた高齢となった場合どのようなあり方が好ましいか」を長年考えてきた、と語られ、天皇が高齢となった場合に国民の象徴としての公務を滞りなく遂行するにはどうするのが良いか?国民の理解を得たいことを求める異例のビデオメッセージが公表された事に端を発します。

つまり、天皇陛下のお気持ちの表明は、高齢による体力の低下で、象徴としての努めを十分に果たせなくなる懸念を率直に語られたもので、高齢化社会における象徴天皇のあり方を広く国民に問いかけることになりました。

はじめに天皇陛下は、天皇という立場上、今の皇室制度に具体的に触れることは控えるとした上で、「社会の高齢化が進む中、天皇もまた高齢となった場合、どのような在り方が望ましいか、個人として、これまでに考えてきたことを話したい」と述べられました。

そして、高齢による体力の低下を感じるようになったと話し、「次第に進む身体の衰えを考慮する時、これまでのように、全身全霊をもって象徴の務めを果たしていくことが、難しくなるのではないかと案じています」と胸の内を語られました。続いて、天皇としてのこれまでの歩みを「天皇として大切な、国民を思い、国民のために

祈るといふ務めを、人々への深い信頼と敬愛を持って成し得たことは、幸せなことでした」と振り返られました。このあと、天皇陛下は、天皇の高齢化に伴う対応について言及し、公務を限りなく減らしていくことには無理があるという考えを示されました。また、天皇の皇位を代行する摂政を置いた場合、天皇が、求められる務めを十分果たせぬまま、生涯、天皇であり続ける事になるとして、否定的な考えを表されました。

天皇陛下が表明されたお気持ちは、退位の意向が強く滲むもので、最後に「象徴天皇の務めが常に途切れることなく、安定的に続いていくことをひとえに念じる」として国民に理解を求めて、お言葉を締めくくられました。天皇陛下は「日本」という名の下に、国民の平安を祈り続けられる御生涯をお過ごしになられるわけですが、私達国民も「日本」の基本的な事を押さえておかなければ、天皇陛下という御存在の尊さを知る事が出来ないのではないかと思います。

●【世界で一番古い歴史を持つ日本】

まず、世界で一番古い歴史を持つ国(世界最古の国)として、ギネス記録に認定されているのは『日本』です。その論拠は、日本の民族が興亡することなく一貫して国を維持したこと、天皇陛下を元首とする政体が一度も変わる事なく維持されてきたことです。神武天皇を初代として、平成の今上天皇は125代目に数えられます。

戦後七〇年以上が経ち、天皇陛下から発

せられたメッセージを真摯に受け止めなければならぬ今だからこそ、シッカリ向き合いたいと思います。日本国民として、まず「日本を知ること」は、日本人であることに誇りを持つことに繋がる大切なポイントだと思っています。日本を知る第一歩として、まず男系天皇の意味、日本が現存する国の中では世界で一番古い国であることを次世代の子供たちに教えることだと思っています。

私も学生時代は「日本の成り立ちについて」考えた事ありませんでした。そんな私が外国に留学した際、自国の成り立ちも知らないと言っていると、自分のアイデンティティー(身分証明)、人間存在としての信用を失うぐらい恥ずかしいことだという事実を知って、驚きと共に悲しい思いをしたことがあります。日本は世界に誇れる国です。世界の人達は、国歌である『君が代』も、世界最古の国歌としてギネス認定されていますし、「日の丸の国旗は世界一インパクトがあり素晴らしい国旗だ」と称賛を得ているのです。こういう事実を、私達日本人で知る人が少ない現状が残念でなりません。なぜ知らないかと言えば、そもそも学校教育で日本の国の成り立ちについて教えていないからです。それを証拠に「日本はいつどのようにできたか」の問いに答えられる人は大変少ないのです。これには戦後のGHQの洗脳教育をはじめとするいくつかの理由が挙げられますが…。



●『君が代』の原歌

わがきみは千世にやちよに さざれい
しのいわおとなりて こけのむすまで
(題しらず・読人しらず)が『君が代』
の原歌となります。西暦904年「古今
和歌集343」に掲載されています。古
今和歌集では「君が代」が「わがきみ」
となっております。「わがきみ」とは、当
時の女性が尊敬したり、愛した男性に対
して用いた言葉だそうです。ということ
は、平安時代のある女性が敬愛する男性
に送った「恋の歌」だったことが分かっ
ています。解釈をすれば次のような内容
になります。

わたしの愛する人の命が、どうか長く続
きますように、例えば、小さな小石が寄り
集まって大きな岩となり、それに苔が生
えるまで、どうか健やかに生きてくださ
いませ、と。

日本の国歌となった『君が代』の原歌
は、平安時代の女性の愛する男性への恋
の歌だったのです。日本国民の感性は本
当に素晴らしいと思います。

また、「君が代」の「君」を天皇陛下
を指しているという見方もあるよう
ですが、天皇陛下であれば「大君」や「御
代」という尊称で申し上げるのが普通で
す。しかし、現在は「君」でも「大君」
というような意味合いで解釈もするよ
うです。と言っただけで、国歌となった「君
が代」は、天皇陛下の御寿命と国民1人
1人の命がいつまでもいつまでも長く
続くことを祈っている歌なのです。※境
野勝悟先生の解釈。

●【上求菩提下化衆生】

一世に一度の伝統儀式「大嘗祭(だいじょうま
い)」については、先月号(※「仕合わせの
和」十二月号)で詳細を記しましたので、
ご参照(ご再読)いただければ幸いです。「大
嘗祭」は、今年の十一月十四日、十五日に
かけて行われるという日程が候補にあがっ
ているそうです。「大嘗祭」の起源は、奈
良時代以前にまで遡ります。新元号に始ま
り、古代から続く天皇陛下(即位の儀式「大
嘗祭」まで、日本国民の私達は真正な気持
ちで、天皇陛下のご退位と、皇太子様のご
即位をお見守りさせて頂くようではありませ
んか。

お釈迦様はお亡くなりになる時に、「す
べてのものはうつりゆく、おこたらずつと
めよ」と仰った。1つの事に対して十年、
二十年、三十年と同じ姿勢で、同じ情熱を
傾けられるのは、ある意味「才能」と言え
るでしょう。良い癖付けがポイントだと思
います。日々の良きルーティーンを作るこ
とが要だと思えます。ルーティーンになる
まで、やり続ける根性と覚悟を肝に銘じ、
そして忘れないようにしたいと思えます。
この道は飽きることはない。飽きる道は本
物ではない。この仕事は飽きることはない。
飽きる仕事は本物ではない。一步一步上が
れば何でもない。まずは一步を丁寧に踏み
出す。二歩目も三歩目も、最初の一步と同
じ気持ちで踏み出す。「十里の旅の第一歩。
百里の旅の第一歩。同じ一步でも覚悟が
ちがう。三笠山にのぼる第一歩。富士山にのぼ
る第一歩。同じ一步でも覚悟がちがう。ど

まで行くつもりか。どこまで登るつもりか。
目標が、その日その日を支配する」とどこ
まで行き、どこまで登るのか。目標の高低
が立志の度を決めます。生き方の姿勢が固
まります。
桃栗三年柿八年、柚子は九年で花咲けり。
梅は酸(す)いとて十三年。蜜柑(みかん)大
バカ二十年。
それでは、人間の花はいつ咲くのでしょうか？

人生は投じたものしか返ってこない。人生
に何を投じたか。投じたものが自分に返っ
てくる。人生は何をキャッチするか。キャ
ッチするものの中身が人生を決める。同じ
話を聞いても同じ体験をしても、キャッチ
するものの中身は千差万別です。つまり人
生は、受け手の姿勢が常に問われる。キャ
ッチするものの質と量は、その人の真剣度
に比例します。人生という大道に「これで
いい」ということはありません。

一步一步の積み重ねです。
一球一球の積み重ね・一打一打の積み重ね・
一步一步の積み重ね・一坐二坐の積み重ね・
一作一作の積み重ね。そして一念一念のつ
みかさね。そんな積み重ねの上に咲く花。
積み重ねの果てに熟する実。それは美しく
尊く、真の光を放つ(仏教詩人・坂村真民)
『上求菩提・下化衆生(じょうごぼだい・げ
しゅじょう)』…どこまでも自分という人間
を向上させていくことが「上求菩提」。「下
化衆生」とは、その自分をもって、人の為
に尽くしていくこと。人は何のために生き
るのか。何のために働くのか。何のために
学ぶのか。その全ての問いに対する答えを

この言葉は包含しています。
人生の法則は常にシンプルです。ただ、
それを身に付けるには一生を要するとい
う覚悟が必要なのだと思います。
最後に、真成寺とご縁のある素晴らしい
檀信徒の皆さま、新たな一年も、ご指
導・鞭撻を賜りますよう心よりお願い申
し上げると共に、皆さまのご多幸を心か
らお祈り申し上げます。

合掌 副住職 谷川寛敬

